

P2-0383

山梨県理学療法士会におけるインターハイ活動報告

小林幸一郎^{1,2)}, 山内 正樹²⁾, 森田 伸哉²⁾, 庄子 理絵²⁾, 田中 優貴²⁾, 古屋 伴仁²⁾,
加納 朱加²⁾, 小尾 伸二²⁾

¹⁾独立行政法人地域医療機能推進機構山梨病院, ²⁾山梨県理学療法士会インターハイサポート委員会

key words インターハイ・メディカルサポート・スポーツ理学療法

【目的】平成 26 年度全国高等学校体育大会(以下, インターハイ)で, 山梨県理学療法士会(以下, 県士会)は委員会を立ち上げて, メディカルサポートを行ったので, その活動を報告する。

【活動報告】平成 26 年 8 月 2 日から 8 日間, ウエイトリフティング・卓球・自転車競技の 3 競技 5 会場, スタッフ 61 名でメディカルサポートを行った。利用は計 247 件であり, 治療目的はリラクゼーション 253 件, 次いで除痛の順で, 急性外傷への対応は少なく, その内容はストレッチ 328 件, 次いでマッサージの順で, コンディション調整が多かった。我々は平成 22 年より県士会でボランティア参加することを決定し, 高等学校体育連盟(以下, 高体連)準備室, 県インターハイ準備室と競技専門部, 市町村実行委員会との交渉を開始した。その中で, 陸上競技・ボート・サッカー・ホッケー・カヌーには断られ, 参入した競技も予算は出せないという回答であったが, 県士会で予算を計上して運用した。またスタッフはボランティアで確保し, 平成 24 年 9 月より教育研修を開始した。辞退者も多く, スポーツ理学療法部員 31 名を動員し 61 名で対応した。

【考察】インターハイは複数県開催により参入するマンパワー確保は容易になったが, 経費削減が求められ, 今回は全競技に参入できなかった。ただ参入した 3 競技には好評と感謝を受けた。今回のポイントは各交渉にあり, 速やかな事前交渉と, 強化指定高校に介入し信頼を築いたこと, 運営自治体へこまめに訪問したことが成功につながった要因である。スタッフには知識や技術の教育が重要であり, 2 年前から研修を行ったことで何とか対応できたが, 研修に参加できない者もあり, レベルの把握には困難を要した。

【結論】今まで県士会ではインターハイの他, 様々な大会のサポートを行ってきた。経費削減の折に大会に参入する困難さはあるものの, 事前交渉やスタッフ教育により理学療法士の活動が広がる場であると思われた。